

語学教育と体験

中 村 啓 佑 (文学部英語文化学科)

はじめに

「現地へ行けば、外国語習熟の速度が速まる」、「現地に行かなければ、対象言語のさまざまな側面を感じ取ることはできない」というのは一般的常識である。しかし、大学は単に一般的常識を鵜呑みにして現地演習を計画し留学を勧めるわけではない。ことに語学教育を担う者には、それなりの理論と経験があり、現地での体験は外国語学習や異文化教育を集中的かつ加速度的にレベルアップさせるといった信念がある。それでは、学習者は現地でどのような問題に直面し、その問題と取り組むことによって最終的に何を獲得するのであろうか。言い換えれば、現地演習は、なぜ、そして、どのように有効なのであろうか。問題は四つの領域にまたがると思われる。

一つは、言語学習そのものの問題であり、初めて外国語の環境に身を置く学習者としての言語体験である。第二は、言語レベルの問題である。英語圏に身をおけば、英語という言語が地域や社会階層やグループによって非常に多様であることを実感させられる。第三はコミュニケーションの方法の問題である。コミュニケーションを円滑にするのは言語だけではなく、これを補助する方法はきわめて多様である。最後の問題はコミュニケーションの方法と密接に関連する文化の問題である。留学や現地演習によって、私たちは初めて異文化環境に身を置き、世界の多様性に気づき、ひるがえって自分が属する文化の特性を意識する。

学問的に言えば以上のようなことになるのだろうが、ここでは、「語学教育と体験」という問題を、本学の英語文化学科が行っているカナダにおける現地演習と、フランス語教員が個人的に世話しているフランスのブルゴーニュ地方のぶどう摘みという二つの事例にそって論じることにする。現地体験が外国語教育と異文化教育の見地から、いかに有効であり、またそれだけに、いかに重要であるかを論証するのが本論の目的である。

1. カナダ現地演習：英語学習

本学の文学部英語文化学科では、2001年以来、約30名の学生が夏休みの1ヶ月間カナダのバンクーバーに出かけ、サイモン・フレーザー大学の本学学生を対象にした夏期講習に参加している。学生たちは、講習での勉強はもちろん、ホームステイでの交流、外国の友人たちとの交流、あるいは現地での見聞などに強烈な印象を受けるが、最終的には楽しい思い出を持ち帰るよう

ある。筆者は直接この現地演習に参加したわけではないので、帰国後学生たちがまとめた英文集 *Dream Catcher* を参考にしながら、彼らの体験を紹介し、分析する。

英語環境に初めて身を置く学生たちが、音、シンタックス、語彙という言語のすべての側面において予想以上の困難に直面するのは当然のことであろう。

まず音であるが、多くの学生が “ their English was too fast to understand ” とこぼしている。しかしながら、逆に何よりの強みは、彼らが生きた言語に取り囲まれていることである。授業中にテレビドラマを見たり、ホストファミリーに映画や演劇につれて行ってもらったりするうちに、やがてそのスピードにも慣れてくる。「慣れる」というのは、必ずしも理解できるようになるということではない。そのような速度で話されているという言語の現実にショックを受けることが必要なのである。そして、現実の英語がもつリズムを、一定のコンテキストの中で聞いて、体に感じ取ることがいずれ聴解力の増大につながるのである。

相手の言うことがわからないというのは、もちろん音だけの問題ではなく、時にはシンタックスの、またときには語彙の、そして多くの場合、それらすべてにわたる複合的な問題である。シンタックスについて言えば、現実の言語生活で話題になることは少なく、それを意識するのは、むしろ授業においてであろう。

ある学生は作文の授業において、自分の文法的知識のなさを嘆くと同時に、高校時代、まじめに文法を勉強しなかったことを悔やんでいる。表現をより緻密に、より豊富にしようとすれば文法の学習は不可欠であるが、このことは理屈でわからせることができるものではなく、まとまった文章を書く作業の中でこそ初めて意識されることである。外国での授業は文法の重要性に目覚める大事な機会でもある。

相手の言うことが理解できない場合、その理由として語彙の難しさがあげられることが多い。しかし、テレビドラマや映画を見るときはともかく、日常の会話における語彙の難しさは学生たちが考えているほど深刻なことではない。なぜなら、状況やコンテキストが意味の理解を助けてくれるからであり、わからなければ説明を求めることができるからである。語彙の不足を意識するのは、むしろ自分から何かを説明する場合、例えば自分の所属する文化について語ろうとするときであろう。

2. コミュニケーションの方法

とはいえ、コミュニケーションの方法は言語だけではない。彼ら彼女らは実物と行動、あるいは絵や写真によって理解させることを思いつく。ある者は実際に日本料理を作って見せ、ある者は折り紙を折り、はしの使い方を示し、家族の写真や日本の写真を見せることによって語彙の不足を補う。そうした行動の過程で、相手が使う語彙を自分のものにしてゆく。

スポーツを含めて一定の技能を持つ者は、友人を作りコミュニケーションをとることがやさし

いようである。現地演習の参加者の中にサッカーのできる学生がいて、すぐに近隣のチームに参加して多くの人たちと知り合いになった。彼はコミュニケーションの手段が言語だけではないことを経験的に理解したのであろう、“I felt that the communication doesn't need only talking but also body language, and facial expressions too. When I watched their eyes, I understood what they wanted to say.”と書いている。

遊びはそれ自体が一つのコミュニケーションであり、遊ぶという行為を通じて学生たちは話し方を身につけてゆく。ホストファミリーには学生たちよりも若い少年少女のいる場合が結構多い。特に年少の子供になると、日本の学生たちはかっこの遊び相手であり、遊べば遊ぶほど、子供たちは彼ら彼女らになついてくる。子供は自分よりも表現能力の劣る大人のいることに気がつき、教えてくれることもまれではない。一緒に遊んだ子供のことをなつかしく語る女子学生は“I learned English from him as we played.”と率直に語っている。

ましてやホストファミリーの両親たちともなれば影響の大きいことはいうまでもない。コミュニケーションは単なる知的行為にとどまらず、多分に感情的要素を含んでいるから、両親との関係の中でコミュニケーションのとり方を実感してゆくことになる。あるhost fatherの次のようなことばは、一人の学生に非常に強い印象を与えた。“I want everyone in my house to be happy. If one of you is not happy, I am not happy either. I always want you to be smiling.”学生たちは、スマイルがどれほど相互に安心感を与えるかを、また、感動的な場面で自然と生まれるハグという身体的行為が、どれほど相互の熱と感情を伝えてくれるかを実感する。ジェスチャーや表情や身体的行為は、ことばの不足を補うだけではなく、ことばの意味を増幅することを身をもって理解するのだ。

学生たちが寄宿する家庭には、他の国からの学生が同居していることが多い。ある学生の家は何力国もの学生が暮らしており、“So we had to help and understand each other”と書いている。また別の学生は、自分よりも英語の上手な同居外国人学生にひけめを感じて避けていたが、“We became more and more friendly whenever we talked.”と語っている。

外国人学生の英語には、しばしば表現するためのヒントが隠れている。すなわち、日本人が考えるほど文法を気にしなくてもいいのだとか、それほど難しい語彙や表現を使わなくても理解させることはできるのだ、というようなことを間接的に教えてくれる。ホストファミリーの子供、両親、それに同居の外国人学生と、現地演習参加者は先生にこと欠かない。

3. 異文化体験

現地演習の大きな目的は異文化体験であり、実際に貴重な効果をもたらす場合が多い。1ヶ月もの間、英語圏社会で、しかも外国人の家庭にくらすのは、ほとんどの学生たちにとって初めての経験である。そのことは、単に英語に触れるとか、英語がうまくなるとかいうこと以上の大き

な意味をもっている。第一は、日常生活を離れて別の文化圏の住人たちと生活をともにすることの意義である。衣食住を含む別の生活様式を体感するという意味で、それは感覚的、身体的経験の領域である。第二は、これまで知識として持っている英語圏社会（この場合には北米社会）を実体験し、自分がこれまで持っていた知識のうち、何が正しく、何が間違っていたかを確認することである。これは知的領域の問題である。総合すれば、自分たちがほとんど知らなかった世界の多様性を自分たちの目で見、肌で感ずるということになるだろうか。卑俗な言い方をすれば「世界は広い」ということに対する驚きである。

食べるものが違う、風呂の入り方がちがうなどは、およそ予測できたことであろうが、“Canada receives many immigrants.”という事実は、彼らにとって大きな発見であり、日本という国家の閉鎖性を考える好機となっている。また別の学生は、“There are many different ethnic groups. They live a happy life without distinction as to race.”と人種の多様性、言語の多様性について言及するとともに、その平等性を指摘している。もちろん、それが表面的であれ、権利上のことであれ、そういう社会の発見と驚きは何よりも大きい。

日本の都会地に住む学生たちは、見知らぬ人たちがどうしが声をかけあい、親しく挨拶するという人間関係を見たことがない。だからカナダでは一般に人々は親切であると感じる学生は少なくない。“People were friendly, not only my family but also bus drivers, clerks and strangers.”バスの運転手と乗客たちの交流は彼らにとって大きな驚きであり、別の学生はこう書いている。“First, I was surprised almost drivers greeted everyone, and almost all people also greeted the drivers.”

家事のすべてを母親がしている家庭の学生にとっては、“When mother went to work, father was cooking in the kitchen. When both had to work, the children cooked lunch or took care of their gardens.”という家庭の分業が新鮮なものに見えたのであろう。いずれにしても、自分たちの生活様式、考え方、社会関係だけが標準ではなく、このように子供たちも働く社会があるということを知るだけでも大きな価値がある。世界の多様な姿を発見し、比較の視点をもってこそ批判精神を養うことができるからである。

4. ブルゴーニュにおけるぶどう収穫体験

現地体験の重要性は以上で言い尽くした感があるが、英語以外の言語を用い、しかも学校で授業を受けるのではなく、労働を通じて異文化に触れるという点でまた違った意味をもつと思われるので、フランス語担当の草壁教授が個人的に世話をしているフランスのブルゴーニュ地方におけるぶどう摘みの体験について簡単に触れておきたい。

1996年から、フランス語上級、演習の受講生のうちの希望者が、フランスのブルゴーニュ地方のぶどうの収穫に参加している。ワイン生産者ジャン＝フィリップ・マルシャン氏が経営する、

ブルゴーニュでも有数のワイン，ジェヴリ＝シャンペルトンの特級と一級の畑で，9月の終わりに5日間から1週間にわたって，村人も参加して一斉に収穫が行われるが，マルシャン氏の経営に出資されている西尾氏の紹介で，本学の学生を受け入れてもらっている。

パリでは草壁教授が学生を空港に出迎え，メトロの乗り方，簡単な食事のとり方など，フランスでの生活の基本的な知識を身につけさせ，駅で自分で切符を買わせ，ディジョンへ出発させる。ディジョンでは，マルシャン氏が車を手配し駅に迎えに来てくれる。氏の提供してくれる宿泊施設を利用し，食事は収穫に従事する人たちと一緒にする。収穫が終わると駅まで送ってもらえるなど，非常に好意的に受け入れてもらっている。

このように，フランス人労働者や外国から来た学生たちと寝食・労働を共にすることによって，学生たちの経験は一挙に広がる。フランス語環境にどっぷりと身をひたすことは言うまでもないが，かてて加えて，新たな知的，身体的経験を積んでゆくことになる。日本にあっても，彼らは農業労働者とほとんど接触をもたないし，ぶどう酒の生産過程がどのようなものであり，どのような自然環境の中で行われているかを知ることもないからである。彼らにとって，外国の学生，特にヨーロッパの学生が，日本の学生に比べてどれほど成熟した考えをもっているかを知る貴重な機会となるからである。

またこの前後にフランス国内を旅することによって，誰の助けも借りず，フランス語だけを使って移動し，旅先で行動し，コミュニケーションをとりつつ，彼らはフランス語の使用者として，また青年として成長してゆく。フランスの生活と文化を体験することの意義は，先に見たカナダの現地演習に劣らず大きいと言えよう。

「なぜ自分は追込に来たのか，その答が見つからず長い間悩んでいたが，ぶどう収穫に参加して，初めてこの大学に来てよかった，と思った」という感想を述べる学生や，この後更にフランスへの留学を決心する者，フランス（語）にかかわる仕事（シェフやソムリエ）を目指す学生も存在することを付け加えておきたい。

おわりに

外国語教育は，どれほど進歩するとしても一定の限界をもつ。英語教育に例をとるならば，教育現場における英語が，どれほど話しことばを採用し，ラングではなくパロールを教えるのだと主張しても，また，教員はすべてネイティブで，教室に英語圏に近い英語環境を作るのだと主張しても，教室で教えられ交わされる英語は，教育のためのエッセンスにすぎないのである。

私は，日本の英語教育が役立たないと言っているのではない。それどころか，良い教育環境の中で学習者がうまく学ぶならば，英語圏に身を置いても，自分の思いを伝えると同時に，地域的，社会集団的なまりのそれほど強くない相手の言うことを，いちおう理解できるであろう。それができるなら，日本における英語教育の目的は相当部分達せられていると言ってさしつかえない。

しかし、プールで泳げるようになった者が、流れの速い川や荒い海で泳げるとは限らない。現実の英語の速度、現実の英語の多様性、現実のコミュニケーションが要求する緊急性（教室ではゆっくり考えさせてくれる）や必要な機転、そうしたものは、やはり英語圏、すなわち現地に身を置いてみないと実感できないし、身につかないのである。

たかだか1ヶ月でいどの現地演習に多くを期待できないのではないかと、という声もある。しかし、毎年の引率者が異口同音に指摘するのは、「最初のうちはどこへ行くのも自分の後についてきた学生たちが、1週間から10日ぐらいすると、とにかく一人で行動するようになる」という著しい変化であり成長である。

異文化に関する知識もまた同様である。知識は、どこまでいっても知識にすぎないが、自分が別の文化の中に身を置き、感覚と精神をフルには働かせることによって始めて、私たちは生きた人間に出会い、生きた人間が動かしている社会に触れ、数々の驚きをもって理解する。その驚きはまた、あらためて自分の所属する文化を不思議に思う驚きにつながる。たとえそうならないうちでも、常に周りから発せられる「日本」に対する素朴な疑問の数々の前に立ち往生し、自文化についての無知を自覚し、それを学ぶ必要性を痛感する。

外国語しか話されていない環境、これまでとまったく違う生活環境の中に身を置くことは、青年にとって大きな冒険である。うまく適応できるか否かが試されることになるし、適応できなかったときのショックが大きいからである。しかし、思い切って飛びこんでみるならば、ある学生のいうように“a bright future and dreams”が開けてくることになる。現地演習は、それまでの外国語学習や異文化学習の、予測を超えた、その意味で波乱に満ちた応用であり、それまでとは比べものにならないほど急激なステップアップである。それまでの学習の整理・反省の場であると同時に、今後の学習を企画・準備してゆくための絶好の機会である。であるならば、現地演習は、その後の人生を左右する可能性をはらんだ知的、精神的旅立ちである、とさえ言えよう。

出発までに何をどう用意するのか、帰国後、学生たちが得たものどう定着させ、さらなるレベルアップへと導くのか、それもまた大学の外国語教育につきつけられた課題であるが、これについては、別の機会に譲らざるをえない。